

らの記憶を有つてゐる、と見らるべきものであるか、否やにある。

一體、變態心理學の上で、二重人格と云ふは、決して意識を有するものが、二つもあると云ふ譯ではない。唯、吾々の唯一の意識が二つの人格として現れると云ふに過ぎないのである。然るに潜在意識を主張する人は、之を以て意識其の物が二つあつて、それが各の人格となつて現れるものと考へてゐるのである。若し吾々の意識が二重人格に於ては、二つの人格として現れるが故に、意識が二つなければならぬと云ふならば、催眠状態に於て暗示を與へると、人格を幾つにも換へることが出来る、否、吾々の意識は常に幾多の社會人格となつて現れるもので、吾々は對手の變るに従ひ、社會的境遇の變るに従つて、變つた人格を取るのである。而して其の人格が其れ自からの記憶的結合を有し、其れ自からの衝動を有するのであるから、意識が幾つも存してゐなければならぬと云ふことになるのであるが、其の實、人格の數だけの別々の意識が存してゐる譯ではない、唯、同じ意識の中に於ける内容の

團グループが、その折々に従つて換はつて行くに過ぎないのである。所謂二重人格に於ても敢てこれと變りはない。要するに、开が病的理由からして誇張されたる状態などに他ならぬのである。して見ると、所謂二重人格の第一の場合によつては、潜在意識の潜在が證明せられるものと云ふことは出来ぬ。

所謂二重人格の第二の場合も決して珍らしいものではなく、吾々が常に經驗する所のものである。何人でもある事を爲しながら、他の事を思考すると云ふやうなことは、或る程度まで出来得るものであるが、それが練習を積むと、ますます自動的に行はれるやうになるのである。始めには思慮を要した事柄も、反覆するに従つて自動的に行はれるに至るのは、所謂習慣の法則であつて、始めには大脳の高等中樞の働を要したものが、反覆の度を重ねるに従つて、下等中樞の働で以て、足りるやうになるのである。パークワースの計算の場合に於ても、つまり反覆の結果、自動的に行はれるやうになつたものに他なるまい。されば、これで以て、潜在意識の存

在を證明するものと爲すことは出来ぬ。

(二)次に、潜在意識論者の據とする事實に、^{オートマチックライティング}自動的書記と稱する、頗る興味ある現象がある。近頃盛んに行はれてゐるブランシエットで以て自動的に文字を書くが如き、即ちそれである。かゝる現象は如何にして起つて来るのであらうか。潜在意識論者の云ふ様に、現實なる意識の下に潜んでゐる第二の心の働であらうか。吾々はしかく信ずることは出来ぬ。一體、吾々の心に意識の活動が起ると、必ず不隨意的運動となつて外部に現れて来るものである。例へば吾々が某といふ文字を考へてゐると、直ちに運動中樞を刺激して、其れに對する身體の運動を惹起して来るのである。これはジャストローが嘗て^{オートマチックライティング}寫自動器で研究した所で明かである。(cf. Jusrow, Eric's and Fabé in Psychology, pp. 307-333.)

されば、吾々が注意をある一語に集中してゐるやうな場合には、何等の意識的努力なくとも、其の文字の書いて来ることのあるのは、敢て奇とするには足らぬ。然

るにブランシエットの使用に熟練した人の言ふ所によると、ブランシエットに手を置いて心を虚うして居ると、自からにも驚かれるやうなことでまで書いて来ると云ふのである。が、こは如何にして起るのであらうか。吾々は之を全く暗示作用に基く者に外ならずとするのである。ジエームス博士は嘗てオートマチック・ライティングの場合に於ては手は無感覺になると云ふことを證明した (Proceeding of the American Society for Psychological Research, vol. 1.) のであるが、之を以て見ると、外界よりの暗示、若くは自己^{オートマチックライティング}暗示によりて文字を書くのであるけれども、手が無感覺となつてゐるから之を感じないのである。これに似てゐるものにテーブル・ターニングと云ふがある。テーブル・ターニングと云ふのは、人が手を机の上に置いて一心を込めてゐると、机が自^{オートマチック}から動き出すを云ふのである。これはフアラデーが既に證明した通り (cf. Scripture, New Psychology, pp. 253-255) 知らず識らず自分で机を動かしてゐるのであるが、之を感じないのである。自動的書記并にそれに似た現

象が、如上の理由で以て説明され得るものとすれば、不可解なる潜在意識なるものを採る必要はありはしないのである。

(二) 潜在意識論者は、記憶なるものは潜在意識によるにあらざれば説明すべからざるもの、従つて、記憶の存することは、潜在意識の存することを證明する者と考へてゐるのである。成程、吾々の記憶に就ては心的經驗がいつれの處にか保存せられ而してそれが再生するやうに見えるのみならず、クラフト・エツピングの研究したイルマなる者は、精神が催眠状態に在る間には、マデアールMadegallの歌を歌ふたりするこゝとが出来たのであるが、然し、再び其の状態に入るまでは、自分の爲した事に就て、何等の意識をも有つてゐなかつた、と云ふやうな事實の存する所を見ると、記憶は潜在意識に於て保存されてゐるのであると云ふ、潜在意識論者の主張が一應道理あるが如くに思はれないではない。併し此の場合に於ける潜在意識なるものは、多くの心理學者が記憶を説明するに取つてゐる心的傾向メンタルポジションと同じく、つまりヘエ

フチングが彼の心理學の中に述べてある、「物的現象の系列は突然止ることなくして大脳の現象の形に於て引續いてゐるのに、心的現象の系列が突然止り、或は先つ所の同じ性質の現象によつて規定されずして、恰も魔法によれるが如く始まることは許すべきではない」と云ふやうな、心的生活連續の哲學的思辯に基いてゐるのであつて、現實なる事實其の物に基いてゐるものではない。現實な事實の示す所によると、心的過程は大脳の過程があつて、それで以て起つて來るのである。例へば、吾々が外物を知覺するやうな場合には、感官に受けた刺戟が傳達せられて大脳の活動を起し、而して知覺作用が始めて起つて來るのである。してみると、心的現象は同じ性質の現象によつて規定されずとも、恰も魔法によれるが如く、始まり得るものであると云はなければならぬ。記憶の場合に於ても然りて、決して過去の經驗が潜在意識に保存されてゐるのではない。唯、過去の經驗が大脳の分子活動の習慣として保存されてゐるに過ぎないのである。(cf. Münsterberg, Grundzüge der Psychologie,

S. 222-224) シヂズは記憶を以て過去の経験の再生ではなくして、過去の物なる性質を有する現實なる現在の経験である、と考へ、而して過去其の物は現在の刹那的意識の内容に於ける一部分であつて、其の中に自からの現在の経験が投出せらるるのであるとなし、此の投出作用を爲すものが即ち潜在意識である (cf. Sidis, The Psychology of Suggestion, pp. 121-123) と考へたのであるが、然し、これは外物の知覺に於て、之を外界に投出する作用を爲すものは、潜在意識の作用によつて、現在の主觀的過去の中に投出せらるゝのではなくして、表象の内容、親知の感及び内容に伴ふ聯想によつて、即ち現實なる意識作用によつて過去との關係が附せられるに過ぎないからである。してみると、記憶の事實を以て、潜在意識の存在を證明せんことは、全然不可能であると云はなければならぬ。

(四) 本能に於ては、目的が意識せられざるに自から目的に適へる行動となつて現れる所から、之を以て潜在意識の理由となさんとするものがある。而もこれ誤れるの

甚しきものと云はざるを得ぬ、何となれば、目的に適へる行動が存すればとて、其の目的を思慮する意識がなければならぬと云ふ理由は、一も存してゐないからである。かのヴント等が、本能はもと目的を意識したる行爲であつたが、反覆せられ、遺傳せられた結果として、其の目的を意識せざるに至つたと云ふ説は、つまりは同じ謬より來たものと云はざるを得ぬ。若し目的に適へる行動の存するを以て、意識の存するものと爲さざるを得ぬものとすれば、植物にも意識があるものと爲さねばならぬことになるのである。何となれば、植物でも一般に環境の刺激に對して、吾々の眼には頗る辨別力を有し、目的に適へる如く見える反應を呈することが出来るからである。例へばかの日廻草が太陽の回るに従つて動くが如きは、目的に適へるものとも見られるではないか、併し、決して意識あつての作用ではなく、ロエーブ教授が證明してゐるが如く、唯、物理的化學的過程に基く所の向性であるのだ。

(cf. Loeb, Comparative Physiology of the Brain and Comparative Psychology, pp. 1-44)

而してかゝる向性は如何なる有機體にも存し、それが神経系統を具ふるに至つてますます複雑な結果を生じて來るのである。詮ずる所、本能なるものも向性に基いたもので、それに意識を伴つてゐるに外ならぬのである。されば、本能に於ては目的を意識せざるに、自から目的に適へる行動となつて現れるの故を以て、潜在意識の存在を證明するものと爲すことは出來ぬ。

(五)精神物理學的實驗の結果によると、刺激は一定の度に達せざれば意識に上らぬ所から、識阈以下の刺激は潜在意識に受納せられるのだと云ふ説が起つて來た。こゝは正しく前に述べて置いた、ライブニッツの *Petites perceptions* の説に他ならぬのである。かゝる形而上學的物心併行論に於ては、物的過程には必ず心的過程が並行してゐると云ふのであるからして、意識には上らぬにもせよ、心的過程の存するものと爲さざるを得ぬのであるが、然しこれは全く證明すべからざることである。

(cf. Wundt, *Gründriss der Psychologie*, S. 371-375) されば識阈以下の刺激が存する

と云ふ事實は潜在意識の存在の證明には、何等の力をも與ふるものではない。

四

以上、述べ來つた所で、潜在意識の存在を證明するに當つて、主張せらるゝ主な點を檢討し了つたのであるが、之で見ると、一も潜在意識の存在を證明するには足りないのである。されば潜在意識と云ふやうな概念は、心理學上に於ては全く無用な長物である。否、かゝる概念が存する所から、迷信者流によつて靈妙不可思議の働を爲す所のものと曲解せられ、精神感應フレイシも、天眼通、天耳通もこの潜在意識の妙用である^とと迄考へらるゝに至つたのである。まことに笑ふべきの極である。勿論吾々とても、或種類の精神感應、或種類の天眼通、天耳通の存することを否定するものではない。然し之等は決して心靈の研究者が考へるやうな性質のものではない。蓋し、或種類の精神感應は日々に行はれてゐるもので、吾々が言語により、舉止に

よつて、互に思想感情を通じつゝあるのがそれである。かういふもの以外に、何も不思議な現象が存してゐる譯ではない。若し有りとすれば、唯、^{ハルシネーション}幻覺に過ぎないのである。それから天眼通、天耳通と云ふやうなものも、催眠状態などに入るとグントの所謂統覺中樞の働が弛んで、感覺中樞の亢奮を起す所から、時に現れて來る現象であつて、常人の眼力、耳力の達しない所のものを視、聽きすることが出来るのである。が、何にも不思議なものではない。然し世に不思議なものが有りとすれば、意識生活そのものである。否、意識生活のよつて燃ゆる所の *Point d'éclosion* の生の火こそ、恐らく吾々には永遠の神秘であらう。

1220
1933

十五 スペンサーの哲學

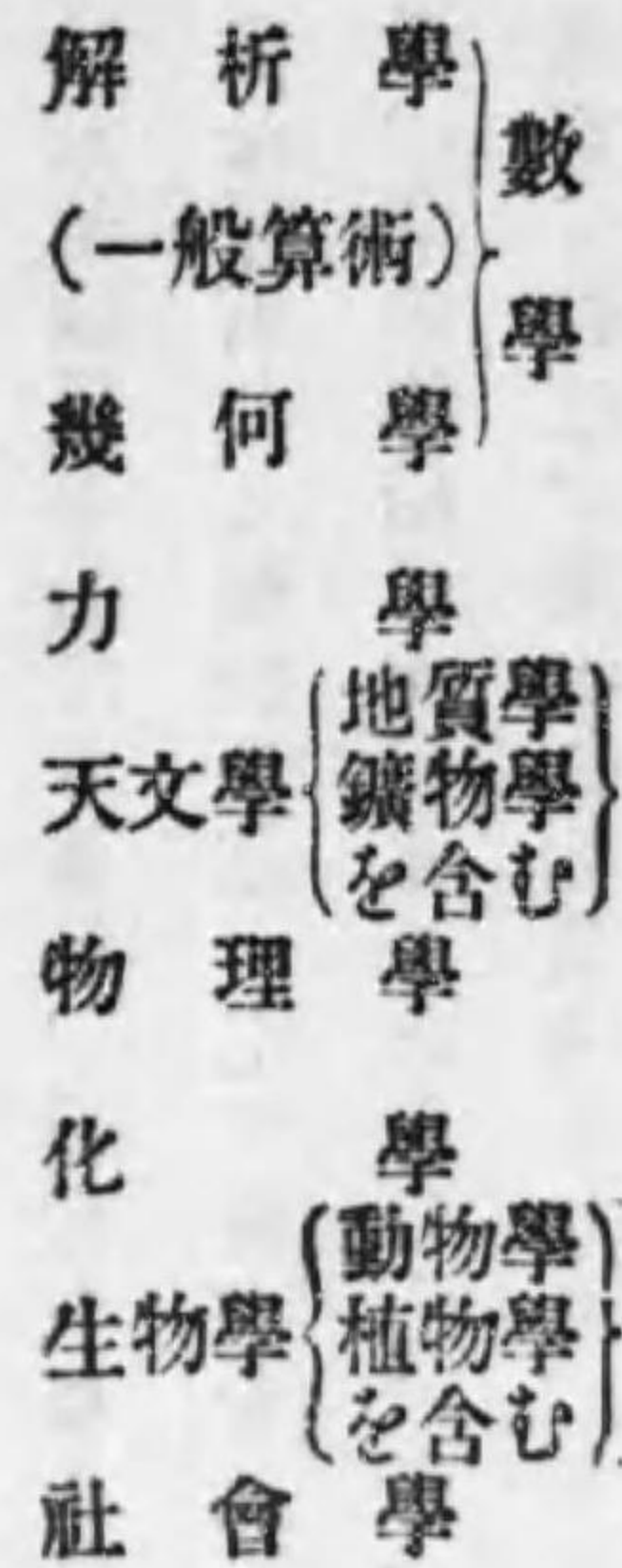
過ぎにし一千九百三年は、英國の哲學界にとりて、如何に哀むべき年にてありけるよ。九月には、經驗的心理學派（舊派）最後の代表者たるアレキサンダー・ペインを失ひ、臘月に入りて、また世界最大哲學者の一人たるハーバート・スペンサーを失ひぬ。二十世紀を迎へてより、年を経ること僅に三年、而かも、前世紀の哲學界に在りて、燦爛たる光輝を放ちし明星の隕つること、しかく相踵ぐや。噫。ヘラクライトスならざるも、誰か *萬法流轉*（*萬法流轉*）をぞ唱へざるべき。十九世紀の思想界に偉大なる貢獻を爲し、殊に我國の思想界に最も廣大なる感化を及ぼしたるものは、ハーバート・スペンサー其人なりとす。渠は、一千八百二十年四月呱呱の聲を揚げたれば、年を享くること八十三、壽ならずとせず。而も其の長生涯

の中に於て、世に公にしたる著述、綜合哲學十卷（一千八百六十二年哲學原理を出版し、一千八百九十六年に至りて完結す）を始めとして、雜著論文等身に及び、其中主要なるもの、東西諸邦の國語に翻せられたるは云はずもあれ、渠が哲學に關する論著にして、英米獨佛伊蘭の諸國の學者の手に成るもの、ユーバークエヒ・ハインツエ哲學史中に採録せるものゝみにても、殆んど二百種を數ふ。豈に盛ならずや。渠死して遺憾なかる可きなり。

ハーバート・スペンサーの哲學を叙述せむとするには、先づ渠が科學の分類より始めざる可からず。而かも、其の分類たるや、思辨を排して、専ら經驗に其の基礎を置ける實驗哲學（Philosophie Positive）を開きたる、佛人オーギュスト・コントに負ふ所少なからず。否、渠の分類は、全くコントの分類より得來りたるものなれば勢之れに溯らざるを得ざるなり。抑もコントの意見に従へば、科學の研究の對象は自然物にして、其の自然物たるや、ある性質に於ては、互に之を異にせるも、其の

根本的性質に至りては、相一致する所あるものなれば、科學を分類するに方りてはあらゆる物體に通ずる最普遍なる性質を研究する科學より、漸を追ひて特殊なる性質を研究する科學に進まざる可からずと爲し、之れを次の如くに分類せり。然しコントに取りては、哲學も、科學も、其の本質上に於ては、決して異なるものには非ず。何んとなれば、實驗哲學の研究する所は、吾人が經驗の範圍を超越することなればなり。言を換へて之れを言へば、現象世界に通ずる法則を知るに過ぎざればなり。

其の分類と云ふは



第一團を形成せる抽象的科學は、關係を論ずるの學にして、實物其の物を論ずるものにはあらず。第二團を形成せる抽象的具象的科學は、物質に依りて現はさるゝ勢力の法則を論ずるものにして、第三團を形成せる具象的科學は、勢力が種々様々に結合して生ずる、現實なる現象を論ずるものなりとす。されば、具象的科學の場合に在りては、抽象的具象的科學の場合に於けるが如く、現實なる現象を構成する要素を論ずる剖析的説明 (synthetical interpretation) にはあらずして、此等の要素の複合によつて結果する現象を論ずる綜合的説明 (syn the heal interpretation) たるなり。是れに由りて考ふれば、スペンサーが組織せむと企てし綜合哲學系統(スペンサーにとりては、哲學と科學とが、本質上の差異を表するものにあらざること、コントの場合に於けるが如し。即ちスペンサーは、科學を以て、一部分統一せられたる知識 (partially-unifed knowledge) と定義し、哲學を以て、完全に統一せられたる知識 (completely-unifed knowledge) と定義しぬ) が占むべき地位は、自から明かなり

と云ふべし。

獨のヴィルヘルム・ヴントは、スペンサーの此の科學分類を批評して、言を爲して曰く、『此の系統に於ては、コントの分類に存する、紛ふ方なき二三の缺點を除き得たるも、(天文學の地位を改め、心理學を獨立科學として認識したること、是れなり) コントの分類に存せし、二の大誤謬は、依然として存せり。即ち科學が階を爲し、先てるものが常に次に來れるものゝ、基礎を爲すべしてふ假定は、スペンサーの分類に據るも、緩和せらるゝ所あらず。且、歴史、言語學、法學の如き、實際世に存する幾多の科學の代りに、社會學の如き新科學を、分類中に引き入れたりと。ヴント又、曰へらく『是を以て、全分類は、事實上存在する科學の分類にはあらずして、一定の哲學的假定及び其の要求に基きて建設せらるべき、科學系統の將來の目錄たるの意義を有す』と。ヴントの謂ふ所、少しく誇張の嫌なきにしもあらずと雖も、而も、スペンサーの科學分類に缺點の存するは、拒否す可きにあらず。

而して此の缺點たるや、スペンサーが私淑せる、オーギュスト・コントに受くるものなること、云はずして明かなり。さは云へ、其の缺點の存する所、或は渠が抱負の大なるを見るべき所にはあらざるか。實に、スペンサーは、自から綜合哲學を組織し、具象的科學中、渠が有機現象を論ずるものと爲せる、科學を採り來つて、一團となし、現象世界を支配する進化の大法を以て、之れを一貫せむと試みしなり。其の勇氣と精力、豈欽羨に値せざらむや。綜合哲學系統と云ふは、即ち哲學原理、生物學原理、心理學原理、社會學原理、道德學原理より成るものにして、哲學原理に於ては、綜合哲學の基礎觀念を論じて、生物學、心理學、社會學の結論となしたり。道德學原理は、要するに社會學原理の接續に他ならざるものなりとす。

スペンサーは、哲學原理の一半に於て、絶對の不可知なることを論じ、他の一半に於て、絶對の顯現たる現象世界の大法を論せり。吾人は是れより進みて、其の説の如何なるかを檢せむ。

スペンサーの哲學は、可知的と不可知的、絶對と相對との區別を以て始まるものと云ふべし。スペンサーが、此の兩者を峻別したるは、カントが、『物其の物』(Ding-an-sich)と現象とを峻別したるに異ならず。唯、カントに於けるが如く、嚴密なる批判を経ざるの差あるのみ。蓋し渠は、此の點に於て、ハミルトン・マンセルを通じて、間接にカントの影響を受けたるものなり。スペンサー説きて曰く、宇宙の本體、萬象の基原の何たるかは、如何に之を考ふるも、遂に不可知に歸着せずんばあらず。よし宇宙を以て、自から存するものとなし、或は自から生じ、或は他の力に由つて、創造せられたるものとせむも、之れを批判的に検討し來れば、全く表象す可からず。思惟す可からざるものなるを、示さざるはなし。又、外界が吾人に刺激を興ふるより推せば、何物か、これが原因たるもの、存せざるを得ず。若し其の原因に原因ありとして、層々之を追究すれば、遂には、終極原因の假定に歸着せざるを得ず。さて、終極原因なるものは、有限なるか、無限なるか、兩者其の一に居ら

ざる可からざるものなるが、今假りに、終極原因を以て、有限のものなりとせば、終極原因以外に、何物か、此の原因に由らずして、生ずるものなかる可からず。而も、終極原因は、其れ以外に、他の原因の存せざるものなることを表すものなれば、是れ不可能なり。之に反して假りに、終極原因を以て、無限にして、他に依屬する所なきものなりと爲さば、全く他と關係を有せざるものと、見ざる可からず。一言以て之を云へば終極原因は絶対ならざる可からず。然るに絶対は吾人の到底考ふ可からざる所、何んとなれば吾人の認識は相對の中に極限せられて、之を超越すること能はざればなりと。是れスペンサーが、ハミルトン及び其の弟子マンセルの認識を假り來りて、絶対の不可知なることを論せるものなりとす。蓋しハミルトンの説に曰く、吾人の意識は、主觀と客觀との對立に縛せられて、互に相制約するもの、思惟は畢竟制約に他ならず (To think is to condition)。且、吾人が外的現象を理解するや、必らず時間的關係に於てす。去れば何等の制約をも受けざる絶対なるも

のは、考ふ可からずと。スペンサーは、大體かゝる認識相對論を基礎として、關係を超越せる絶対なるものは、關係の中に周旋する思惟の及ぶ所にあらずとなし、科學の基本觀念たる空間、時間、運動、勢力、物質、主觀と客觀との統一たる自我乃至意識の根本状態たる感覺 (feelings) の如きも、其の本質及び其の起原に於て、全く解す可からざる、實在の記號なりとなせり。

スペンサーが、絶対の認識す可からざるを唱道せること、以上述ぶるが如しと雖も、渠はハミルトン・マンセル等が主張せるが如く、絶対の觀念を以て、單に否定にして、其の存在の疑ふ可きものなりとは爲さずして、絶対は認識す可からざるも、相對的現象の本體なるものが、存在することは疑ふ可からず。吾人の認識は絶対に達すること能はずして、相對の中に限らるゝと雖も、吾人が相對を認識すと云へば、是れやがて、相對ならざるものゝ存在することを語るものにして、其の相對ならざるものゝ顯現が、相對なるなり。且、夫れ相對と絶対とは、相對立せるものにして、

若し兩者の關係が考ふ可からずとせば、相對それ自からも、遂に考ふ可からず。斯くてあらゆる思惟は、休せざる可からざるなり。勿論、吾人は實在に就て的確なる意識を有するものにあらず。而かも不可知的なる實在（スペンサーは、之を普遍的勢力と呼べり）の存することは、之を拒否す可きにあらず。宗教が生命を托するは、實に科學が明かに認識すること能はざる、此の絕對界に在りと爲せり。

スペンサーが、絕對を以て、不可知的となしつゝも、此の不可知的のものが、終極原因にして、吾人の認識する世界は、一として其の顯現ならざるなしと説ける所、明かに自家撞着の存する所にして、批評の刀の入るは、正しく此の間なるべし。實にスペンサーの哲學に於ては、絕對は單に認識す可からずと云ふにあらずして、認識す可からざる絕對の存することを云ふものなり。あらず。認識す可からずと云ふ其の絕對も、實を云へば、全く認識す可からざるにはあらず、そが普遍的勢力として現れて萬象となることは、認識し得らるゝなり。何んとなれば、スペンサー自か

らは、之を認識し得たればなり。由是觀之、スペンサーの哲學は、實在の存在を假定する、一種の獨斷哲學なるに他ならざるを知るべきなり。スペンサーは、己が哲學を素朴なる實在論（naive realism）に對して、變容實在論（transfigured realism）と呼びぬ。其の之を不可知論（agnosticism）と稱するに至りしは、ハックスレーに始まる。パウルゼンは之れに、不可知的一元論（Agnostischer monismus）なる名目を下せり。

以上述べ來れるが如く、スペンサーは萬象を以て普遍的勢力の顯現なりとなし、其の顯現中に行はるゝ大法を發見せむとせり。渠に従へば、勢力永存の大則は、最高最終の眞理にして、あらゆる他の法則は皆是れより演繹せらるべきものなり。即ち自然には變化なきこと、勢力は少しも其の量を失ふことなくして種々に變形し得らるゝものなること、運動は常に最少抵抗の方向を取るものなること、あらゆる運動は旋律的リズミックなること等は、悉く勢力永存の大則より結トし來れるものに他ならずと

なす。以上は孰れも宇宙的—般眞理なるも、單に剖析的眞理なり。剖析的眞理は具象的現象の法則たること能はず。哲學は前にも云へるが如く、完全に統一せられたる知識なるを以て、綜合的眞理を要求するなり。凡そ物質と運動とはあらゆる現象の要素にして、現象には絶對的固結なるもの存することなし。是れ物質と運動とが絶えず、其の分配を實にするに由る。而して其の作用は進化 (evolution) 並に退化 (dissolution) と稱する二過程によりて行はるゝものなりとす。進化とは、即ち運動の散失によりて、物質が一體に結合する手續を稱し、退化とは、即ち物質が分解によりて、收得する手續を稱す。前者は、例之、地球が冷却するに従ひて、其の運動を失ふ。而も地殻は益々固を加ふるが如く、後者は、例之、地球が全く其の運動を失ふに至れば破滅して、元の星雲に歸し、無邊の空際に渦旋運動を爲すべきが如し。

物質は進化の過程によりて、分散の状態より集合の状態に移り行くと同時に、劃

一なる状態より多様なる状態に移り行くものとす。言を換へて之を云へば、物質が結合して一體となるや、所謂分化なるもの起る。斯くて混沌たる状態より、判然たる状態に進み行くものなりとす。

以上の法式は、スペンサーが、嘗に物的現象の説明に應用したるのみならず、心的現象の全體にも應用したる所、渠は物理學化學の如き抽象的具象的科學は、勢力永存の大則の下に立つを以て、進化の大法の支配を受けざれども、天文學の如き具象的科學に至りては、全く其の支配を受くべきもの、而かも進化が充分なる發展に達するは、渠が有機現象を論ずるものなりと爲せる、生物學、心理學、社會學の上に於てなりとせり。

蓋し進化の大法たるや、スペンサーが、ダーウキンの人種起原論の出づるに先つて、綜合哲學の基本觀となしたるもの、其の功や眞個に多しとするに足る。而も進化の法式を以て、あらゆる具象的現實を論せむとするに至りては、餘りに概括的な

りと云はざる可からず。假りに一步を譲りて、自然の世界に於ては之を以て足れりとせむも、吾人が心的生活てふ紛糾錯綜極りなき現象を論ずるに至りては、進化の法式一天張を以ては、遂に説明す可からざるなり。

進化の向ふ所は均勢の状態に達せむとするに在り。然れども一朝此の状態に達するや、進化は止んで退化起らざるを得ず。开は行星系統の死滅、生物社會の死滅によりて見るが如く、全體としての宇宙に就ても亦然るなり。然り而して、スペンサーの意を推せば進化退化の大法は永劫に反覆して止むことなきものなるに似たり。是に至りて、吾人は、ヘラクライトス、エムペドクレス等の上代希臘哲學者乃至佛敎所說の世界生滅の成行を想起せざるを得ざるなり。

スペンサーは、其の特殊哲學に於て、哲學原理の中に闡明せる進化の大法を以て生物現象、精神現象、社會現象を説明せむと試みたり。吾人は茲に其の梗概を叙述して、渠が果して成效せしや否やを檢せむ。

生物學原理に於て、スペンサーは、進化論の基礎の上に生物現象を説明せむとせり。渠の意見に従へば、生命とは内的關係が外的關係に常に順應することにして、有機體の機能は有機體の組織に先つて存し、且、之を定むるものなり。言を換へて之を云へば、有機體の組織は、過去の有機體が經來れる内外交互作用の限りなき系列の遺傳に遺傳を重ねたる結果に他ならずとす。即ち各有機體は外的條件に順應すれば生存し、順應の度を失へば死滅す。而して外的條件に順應するの結果として、機能の變化を生じ、機能の變化は、世代を經るに従ひて、組織の變化を惹起し、組織の變化は、後代に遺傳せらる。かくて有機體は益々新種を生じ、益々發展するなり。スペンサーが、一代の中に獲得したる性質の遺傳することを主張するに對して、獨のヴァイスマン等は其の然らざるを主張すれども、茲には割愛せざるを得ず。要するに、渠の生物學原理は、一般に科學的概括の傑作、綜合哲學中の壓卷と認めらる。

スペンサーが、進化論の基礎の上に、一面には、心的生活の心理學的剖析を試み、一面には、認識論を構成せむとせしは、渠の心理學原理に於てなりとす。スペンサーの説に従へば、精神現象を論ずるの學は分かれて、客觀的心理學、主觀的心理學の二となる。前者は觀察に由りて心理生活を身體の活動と關聯して之を考察す。是を以て客觀的心理學は生物學の一分派たるなり。反之、後者は内省及び内省的剖析に由りて、意識を研究の對象となせるものなれば、主觀的心理學は、恰も主觀が客觀に對立せるが如く、あらゆる他の科學に對立せる一種特別なる科學 (science sui generis) たるより、スペンサーは、精神現象の下には、心的實體の存することを認めたりと雖ども、心的實體たるや、其の顯現たる現象を認識し得るのみにして、本體は之を認識するを得ざること、物的本體と毫も異なる所なきものとせり。意識の全内容は感覺 (feelings) 及び感覺相互の關係よりなるものにして、統一的に結合せらるれば知覺となり、而して主觀が過去の經驗の中に於ける類似したるものと聯合

するものなりとす。蓋しスペンサーは此の點に於て、英國傳來の聯想學派の學說を奉せるものなりと云ふべし。

スペンサーは、客觀的心理學に於て、身體てふ有機體と關聯して行はるゝ精神進化の階級を示せり。其の説に曰く、心的生活の最下形は、反射運動にして、感官が發展して、種々なる刺激を種々に感じ得るに至れば、本能運動なるもの起る。而して外的状態が複雑の度を加ふるに従ひ、其れと平行して、中樞機關は益々複雑の度を増すを以て、精神現象は自動的性質オートマチックを失ひ、運動の動機は阻止せられて、茲に始めて知覺心像及び記憶心像を生じ、斯くて本能は漸次に理性となり、意志となるに至ると。主觀的心理學に於ては、最高なる精神現象より出發して、之を剖析しつゝ、以て單純なる要素に達せむとせり。スペンサーに従へば、思惟とは類似若くば差異の關係より成るものにして、類似の關係の認識は差異の關係の認識を豫想するものなりとす。至して此の法則は到る處に行はるゝものにして、高尚なる推理も、其の

本質に於ては、最も下等なる本能的行爲と決して異なる所なきもの、前者に在りては單に印象が複雑なるの差あるのみ。蓋し思惟の内容は、意識の状態の分化によりて起るもの、新状態が、認識せられて一思想となるには、舊状態に結合されざる可からざるなり。

認識論に於て、スペンサーは、一面、實在論が觀念論に比すれば、必然的思惟の効力を假定すること少なきを云ひ、一面、精神の進化に於て、外物に關する意識の状態と自我に關する意識の状態との間には、常に判然たる區別の存することを云ひ以て己が變容實在論を辯護せむと試みたり。其れに就て真理の標準とは何ぞやとの疑問を提起し來り、之れに答へて、矛盾的反對の考ふ可からざるに在りとなし、且、進化論を以て經驗論と先天觀念論とを調和せむとせり。即ち渠は吾人の有する觀念は、經驗論の主張するが如く、吾人一代の經驗に基くものゝみにはあらずして、其の一部は、先代の經驗の遺傳せらるゝものなりとなし、個人に取りては、先天觀

念論を是とし、人類に取りては經驗論を是としたり。

超有機的進化シュルパルオーガニクの法則を説明するものは、スペンサーの社會學なり。渠に従へば、社會は其の組織、其の機能、其の部分と部分とが交互作用を及ぼす點に於て、其の生長の種類に於て、人爲的のものにあらずして、自然に成りたるもの、即ち有機體なりとす。而して社會有機體の最終の單位は、原始時代に在りては、家族なるも、今日の社會に在りては、個人なりと云へり。スペンサーは、社會有機體を説明するに、動物有機體の比論を以てす。曰く、動物有機體に在りては、細胞の層は、内外の二に分かれ、外層は空氣、水等の環象の影響に暴されて、一部は之を容れ、一部は之を退く。内層は同化するを得る物質を取りて、之を消化するなり。細胞の内外層は原人の部落に於ける外敵を防ぐが爲に存する武人の階級と、食物を得るが爲に必要な労働を爲す、婦人及び俘虜より成れる部落の一部とに對立するものなり。動物の進化するに従ひ、外層より全身を支配する神経系統を生じ來るが如く、社會

有機體に在りては、武人の階級より支配者の階級を生じ、外層と内層との間に養液の分配に役立つ血管の發達するが如く、社會の支配權を掌握する部分と、社會の生産を主宰する部分との間に商業交通なるもの發達し來るなり。要するに、動物有機體に至りても、將た社會有機體に在りても、活動する部分には、常に簡單なる機關より複雑なる機關に進む所謂進化なるもの存すと。社會有機體の動物有機體に異れるは、前者に在りては、唯、意識が有機體の各部に擴れるの差あるのみ。スペンサーは、人類の觀念、習慣より宗教、政治に至る進化を示さむとせり。渠に據れば、あらゆる宗教の起原は、祖先崇拜、死者崇拜に在り。陰影、反響の如き現象が、身體の死するも猶、無に歸せざる自我の存するてふ信念を起さしめ、かくて神の觀念を生ぜり。禮拜は、畢竟するに、死者を恐怖するに基く。政治組織は、もと鬭争の必要より起りしものなれば、原始的尙武の社會に在りては、中央集權に傾くも、産業主義の發達するに従ひて、自由制度を生じ、政府の職權は、漸く制限せらるゝ

に至る。今日の社會は、即ち産業的型タイプに相當するものなれば、法律萬能の時代は、既に過去の夢に屬するものと云ふべし。スペンサーは、産業主義なるものは、個人が國家の爲に存すてふ信念をして、國家が個人の爲に存すてふ信念に變せしめたりと云へり。

生物學、地理學、社會學等の研究より得來りたる、結果の上に建設せらるゝは、スペンサーの倫理學なりとす。スペンサーに従へば、道德世界も自然の世界と同じく、進化の大法に支配せらるゝもの、道德律は、畢竟するに自然法則の接續に他ならず。凡そ人間の行爲なるものは、運動としては、全く物理的に之を考察するを得るものにして、孤立せるあり、或は互に關聯せるあり。蓋し動物界に在りても、下等なる行爲は孤立して關聯する所あらず、何等の目的をも有せざれども、开が高等となるに従つて、益々複雑となり、關聯と目的とを有するに至るが如く、人間に在りても、德義に合せざる行爲より德義に合する行爲に進むに従ひ、關聯と目的とを

有するに至るものなりとす。然らば其の目的とは何ぞや。スペンサー之に答へて曰く、自己の保存及び種屬の保存、即ち是れなりと。然れば個人の生命を高め、兼ねて子孫同胞の生命を高むるもの、是れ善にして、之れに反するもの、不善なるなり。且、スペンサーの生物學上の假定に従へば、快感を興ふる行爲は悉く善なるなり。さは云へ渠は、經驗的功利論者が主張するが如く、所謂良心なるもの、存在を否定するものにあらず。何んとなれば進化論上、人類と云ふ立場より之を見れば、所謂良心なるものは、實利に關する經驗の積集せるものに過ぎざれども、個人に取りては、遺傳の結果として之を得るものなれば、其の先天性を拒む能はざればなり。實にスペンサーは此の點に於て、進化論を以て、倫理學上に於ける直覺説と經驗的功利説とを調和せむと試みたるものと云ふべし。渠に従へば、道德上の義務と稱するものは、抽象的感情にして、幾多の積集せる經驗より生じ來れるもの、而して之れに伴ふ強制的要素は、國家、社會、宗教等の責罰を恐るゝの念より起れるものに

他ならず。而も恐怖なるものは、一時的のものに過ぎざれば、道德的意識に於ける強制的要素は、道德の進化するに従つて消滅す可きものなりとす。社會的生活の上にて、自利と利他とは、其の初め相反するものなるも、順應の進むに従ひて互に相調和し、自利利他圓滿の理想的状態に達して、其の對立は全く止むに至る。而して斯かる道德的理想の狀態は、自然の進行が獨り之を導くものなりとせり。

以上述べ去り、述べ來れる所を以て、スペンサーの特殊哲學の要點は、略、明かなるべし。若し夫れ精透なる批評眼を以て、仔細に之を検するに於ては、議すべき所實に少なからざる可きも、其の大處を把握すれば、他は多く之を云ふを要せず。然らば其の大處とは何ぞ。云ふ迄もなく、スペンサーの哲學が、徹頭徹尾自然主義なることは是れなり。渠は有機現象を説明するにも、將た社會現象を説明するにも、等しく物質、運動、勢力等の語を以てせり。是れ慥に眞理の半面を見たるに過ぎざるもの、渠の心理學、渠の社會學、渠の倫理學が大なる缺陷を示せるは、敢て怪む

に足らず。パール・バート嘗てスペンサーの社會學を論じて、其の結尾に曰く、「スペンサーの社會學及び倫理學ほど種々の方面の知識を應用したるは稀なり。而もスペンサーの系統ほど、人間行爲の動機を輕視したるも稀なり。蓋し渠は人間世界に於て、自然の一面を見たるのみ、自然と精神との對立に至りては、渠の認識せざりし所、其の偏見に陥しもまた宜なりと云ふべし」と。言ひ得て肯綮に中るものと云ふべし。スペンサーの自然主義は、嘗に渠の綜合哲學中に現はるゝのみならず、渠の教育論に於ても、渠の政治論に於ても、到る處、其の端を現はさざるはなし。而して其の結果、教育論に於ては、言語の如き精神的財寶の價值を藐視するに至り、（此の點に關して一千九百二年發行の エデュケーションナルレビュー 教育評論紙上にウイリアム・ハリス博士の論あり。就て見るべし）。政治論に於ては、其の初め社會主義より出發して土地の私有を廢せむことを主張せしも（一千八百五十年に公にせし ソシヤルスタチフラス 社會平衡論を見よ）、遂に行政的虛無説（administrative nihilism）に陥るに至りぬ。スペンサーに災せし

ものは、實に自然主義なるかな。惟ふに渠の哲學に於て、自然主義の覇を稱するに至りしは、是れやがて、思辨哲學に續きて起れる、自然科學的精神が、其の高潮に達せしことの徵證なるなからむや。而かも物極まれば變ず。英國に於ける新ヘーゲル學派と稱する近時の運動の如きは、正しく此の自然主義の哲學に對して起れる反動と見る可きにはあらじか。

スペンサーの綜合哲學が、大缺陷を有すること、以上述ぶる所の如し。而かも渠の哲學が殆どあらゆる科學より其の材料を得來りたるの點に於て、誰か其の該博なるに驚嘆せざらむや。ルードヅヒ・シユタイン嘗てスペンサーの哲學を以て、ライブニッツの材料を用ひて構成せられたる哲學なりと云へり。蓋しライブニッツは、百科の學を該綜せし點に於て、アリストートルレス以來唯一人と稱せらる。今、スペンサーを以てライブニッツに比するに、ある點に於ては、渠の智識は淺膚なり、との批難はあらむ。而も其の該博なる智識を打つて一丸となし、以て綜合哲學を組織

せり。豈尋常頭腦を有するものゝ爲し得る所ならむや。スペンサーもまた巨人なるかな。

現代哲學への途

現代哲學への途

著者 川合貞一

大正十一年九月二十日印刷
大正十一年九月廿二日發行

東京陸書院

東京神田區表神保町四番地
電話 四〇〇二番
振替東京一四七九番

現代哲學への途

定價金貳圓八拾錢

大正十一年九月二十日印刷
大正十一年九月廿二日發行

著者 川合貞一

發行者 內藤加我

印刷者 高梨知愛

東京市神田區今川小路二ノ一

發行所 東京光閣書店

東京市神田區表神保町四番地
電話 四〇〇二番
振替東京一四七九番

川合貞一著

學哲から教育へ

近刊

503
135

終